ら退去せよ」と数回繰り返し放送した。崎戸丸の将兵四千と船員が固唾（かたず）を飲んで見守るうち、上海丸の後半部の沈下の速度は次第に増し、船尾が上向きになると同時に、殉職を決意して一人船内に残っていた船長が鳴らす悲しい汽笛の響きを残して、上海丸は完全に海没したのである。

崎戸丸は、上海丸の海没を見届けた後、直ちに現場を離れ、南下を開始した。崎戸丸に救助された上海丸の船客四百名は、一旦、台湾の高雄港に上陸した後、別便で無事帰国したことが後日判明した。

◇◇◇

誤爆を受けた原住民村落の救護活動

昭和十九年十月、私は小スンダ列島の防衛に任じていた濠北派遣第四六師団軍医部付き衛生准尉として、スンバワ島に駐留していた。スワバワ島の面積は四国とほぼ同じ、人口は約三十万人、島の西部と東部に一人づついるサルタン（回教国の族長）によって治められていた。オランダの植民地時代には、島の西部に司政官一人と一箇分隊程度の軍隊を置いていたようである。島民の文化の程度は低く、暦もなく、正確な年齢も判らないという状態であった。スワバワ島には公立の病院が島の西部に一ヵ所、東部に一ヵ所設けられ、医師が一名づつ勤務していた。

大東亜戦争が勃発（ぼっぱつ）し、オランダが敗退後のスワバワ島には日本海軍が一箇小隊駐屯していた。第四六師団は、スワバワ島に上陸した日本陸軍最初の部隊で、連合軍の進攻に備えて、現地自活の傍ら日夜陣地構築に励んでいた。昭和十九年に入るや南方の制空権も制海権もアメリカに奪われ、スワバワ島上空に偵察のために日課のように飛来する敵機や近海に出没する敵潜水艦も拱手（きょうしゅ）傍観のほか途なしの状態に立ち至った。

昭和十九年十月のある日、四六師団司令部上空にB29が一機、超低空で飛来、司令部上空を旋回中、近くの丘陵上に陣地を構築していた高射機関銃隊が、撃墜可能と判断し、猛射を加えたが撃墜は不可能であっ